

〈実践報告〉

自信をもって親子と触れ合うことが できる実践力を高める

—— 子育て支援活動における教育実践 ——

木 村 美知代

I はじめに

今日、親族や地域社会の互助が希薄になり、家庭や地域における子育て・子育てが閉塞的な状況がみられる。そのため、保育所保育指針が改定、幼稚園教育要領が改訂され¹⁾、保育士養成課程には「保育相談支援」が新設²⁾されるなど、子育て支援が大きな役割を占めることになった。子育て支援は子育ての喜びを共有する「心」の支援が最も大切であり、保護者の子育ての不安を心理的に支えるだけでなく、子どもの発達の道筋を長期的に押さえ、子どもに必要な経験は何かを具体的方法とともに分かりやすく伝えることが求められる。そのためには、保育者には専門的な知識や理解力・判断力・実践力が求められるとともに、地域の中で共に歩む姿勢をさらに強く示さなければならないのである。

毎年、保育者の離職率は高く³⁾⁴⁾、保護者や同僚との人間関係に疲れて退職に陥る者もいると聞く。乳幼児は、身近に特定な保育者がいると安心して動いたり気持ちを立て直したりして主体的に遊ぶことができる。若くて活動力がみなぎる保育者は重要な存在である。学生には、人間関係の中で打たれ強く、粘り強く自己コントロールして、子どもとかわり続ける保育者になってほしい。

本来、遊びは子どもに任せておけばよいわけではなく、指導者主導で経験させればよいものでもない。子ども理解で終始し具体的援助が乏しくても、計画性が幼児理解に基づかなくても困る⁵⁾。保育実践の場では、常に乳幼児の理解に戸惑い、かかわり方に悩み、保育する難しさから、保育者の適性があるかと葛藤を経験することになる。

子育て支援活動は、講義で学んだ親子とかかわる目的意識や見通し、親子の関係性、親子の心の動き、かかわり方、環境の再構成などを実際の場で意識的にかかわり、自分の保育を振り返る繰り返しを重ねる機会をもつことになる。

実践の場が多いほど、保育を高めようと感性を磨き、コミュニケーション能力を育くむ機会が増す。保育の難しさを感じた経験が多くなるほど、困難を乗り越えた面白さや学び続ける意欲が高まり、保育に自信をもってかかわる精神面の強い学生を育てることができると考える。1年次から子育て支援の実践の場が提供され、学習内容を自覚的に展開する学びの習慣を定着させることで、「自信をもって親子と触れ合うことができる」実践力と精神面の強さを併せもつ学生を育てることになると考えた。

II 研究の目的

同朋大学社会福祉学部子ども学専攻では、地域子育て支援団体・サークルや行政との協働により学内子育て支援「キッズカレッジ」を開催し、1年次「子ども学総論」「子ども学演習Ⅰ」、2年次「子ども学演習Ⅱ」及び、3・4年次「総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で、4年間のキャリアステップ学習⁶⁾を行い、子育て支援活動の実践的な基礎を学び続けている。

本論文は、キャリアステップ学習の中でも、1年次前期「子ども学総論」で行ったキッズカレッジにおける実践から、①目的を明確にもつ ②事前準備を行う ③実践する ④事後学習を行う の循環の中で、親子へのか

自信をもって親子と触れ合うことができる実践力を高める

かわり方を学び、保育内容の理解を広げ深め、考え続けて実践する態度や意識をもち続けければ、「自信をもって親子と触れ合うことができる実践力」が身につくと考えた。

実践を振り返ることで、指導の在り方を明らかにすることが本研究の目的である。

Ⅲ 研究の方法と内容

1. 研究対象 2012年度1年生 13名

2. 研究手続き

(1) 事前学習

① 講義と外部講師との打合せと、内容

「子ども学総論」で、参加目的、方法、遊びの内容、遊具・親子へのかわり方などの講義を受けた。3年生が開催するキッズカレッジを見学し、「好きな遊び」と、「みんなで遊ぼう」の2場面の講義のイメージを具体化した。

学生は「好きな遊び」で、子どもの遊びに寄り添い、子どもが学んでいることを感じることがかわり方の礎になり、学生が感じとった子どもの育ちを親に伝えることの重要性を学んだ。親が我が子の育ちを学生から言葉で認められることで、我が子のよさを再確認できる。学生とともに子どもの成長を喜びあうことで、自分の子育てに自信がもて楽しくなるなど、親の子育て力が培われ、親自身の育ちにつながることを学んだ。

実施に当たっては、NPO法人（特非）親子支援センター CRAYON LAND（クレヨンランド）や中村区民福祉部民生子ども課、中村学区民生児童委員、中村保健所、近隣幼稚園や保育所などの外部機関と協働開催している⁶⁾。そのため、地域の子育て支援状況を情報交換するなどの連携

振り返りシート		月 日 (曜)	学生氏名 () 年
自分のねらい	子どもに対して		
	保護者に対して		
自分の頑張りをPDCAサイクルで見直し、評価してみましょう。			
	◎ ○ △ ×	摘 要	
P (計画)		子どもに対して「ねらい」をもつことができたか	
		保護者に対して「ねらい」をもつことができたか	
D (実行)		子どもとねらいに添ってかかわることができたか	
		保護者とねらいに添ってかかわることができたか	
C (評価)		子ども理解やかかわり方は十分だったか	
A (改善)		次回の方法や内容を考えることができたか	

表1 振り返りシート

の一環として、クレヨンランドなどに実技指導の講義を依頼した。また、子育て支援の具体的なかかわり方についての事前打ち合わせを学生とともに外部講師と行った。

② 3年生開催キッズカレッジを見学

3年生が開催するキッズカレッジを見学し、その様子から、子どもは遊んでもらう受け身の存在ではなく、発見し、工夫し、学びながら自分で遊ぶことを知った。また、乳幼児の心の動きを理解し様子を把握することで子どもの学びが保障されることを確認した。さらに、乳幼児の発達過程をイメージして、興味を尊重しながらおもちゃや環境を工夫することを、キッズカレッジの遊具や教師の動きで具体化した。

③ 「振り返りシート」

学生は、講義や打合せから、自分の実態に応じた目的を「振り返りシート」(表1)に記入することで、これらの事前学習の内容を自分のこととして把握した。

自信をもって親子と触れ合うことができる実践力を高める

(2) 事前準備

① 役割分担と自主練習

「みんなで遊ぼう」の集団活動を行うにあたり、2～3人のグループとなって、「導入のリズム遊び」「パネルシアター」「展開のリズム遊び」「終結のリズム遊び」などの役割を分担した。

② 壁面飾りを作成

「誕生表」を作成することで、壁面飾りを工夫した。「どんな壁面を作ろう」と、全体像を話し合った後、学生たちは、それぞれのパーツを分担したり集まって一緒に作ったりするなかで、集団活動の自主練習も行った。会場は、昼休みに全員で設定し、「誕生表」を正面に貼り、当日を迎えた。その他の準備は先輩学生やボランティアリーダーが行った。

(3) 実践活動

5月15日(火)・7月3日(火)両日、2時限目に参加。10:00から3・4年生が実施する「好きな遊び」に、1時限目を終了した1年生が加わった。

(4) 事後学習

① 反省会で、意見交換

反省会でボランティアリーダーや3・4年生の意見を聞き、質疑応答で、自分たちの行動を振り返った。

② レポート・アンケート提出

自分たちが気づいたこと、反省したことを自由に記述する「キッズカレッジに参加して」のレポートを提出させ、検証を試みた。1回目のレポートでは検証が不十分な箇所が判明したため、アンケート(図1)に再度、記入させ、その結果を検証した。

③ お便り作成など

随時に個人面談を行い、学生自身が活動の成果が意識できるように心が

けた。また、学生が作成した保護者へのお便り「ひよこだより」を、ホームページに掲載し、学生自身の振り返りを確実にした。ボランティアリーダー講習会⁶⁾で自分たちの全体活動を他の学生に紹介する機会を作り、自分たちの集団活動の充実感や達成感が得られるようにした。

④ 前期レポート提出

前期末レポート「子ども学総論で学んだこと」のテーマで活動のまとめを提出させ、そこでの検証を試みた。

3. 結果の処理

(1) 調査方法

① 実施後に自由記述式レポートを1回実施

1文に複数の内容が記入された場合は分割して複数文とし、重複した場合は割愛した。その結果、103の記述となり、それを整理・分類した結果、上級生やボランティアリーダーについて30、親子23、今後22、心配14、仲間関係7、環境5の6項目になった。

② 質問紙によるアンケートを2回実施。

質問項目は8項目。うち3項目は5件法、残りの3項目は3件法、特定の選択肢を選択した場合はその理由を求めるものが6項目、自由記述2項目で実施した。

③ 前期「子ども学総論」最終レポートで分析。

キッズカレッジに関する内容を取り上げ、整理考察した。1文に複数の内容が記入された場合は分割して複数文とし、重複した場合は割愛した。

(2) 調査内容

① 「キッズカレッジに参加して」で、思いついたことを文章化してレポートとして提出させた。

② 質問紙によるアンケート (図1)

自信をもって親子と触れ合うことができる実践力を高める

【質問1】キッズカレッジに参加した、あなたの目的を書いてください。
【質問2】実施前に心配、疑問など困ったことがありましたか。 ①あった ②すこしあった ③なかった
*①②と答えた人はどんなことでしたか。
【質問3】参加した感想を教えてください。 ①とてもよかった ②よかった ③どちらでもない ④あまりよくなかった ⑤よくなかった
*③④⑤と答えた人はどうしてでしたか。自分自身にとってためになったことを書いてください。
【質問4】実施後に心配、疑問など困ったことがありましたか。 ①あった ②すこしあった ③なかった
*①と答えた人はどんなことでしたか。
【質問5】親子とかがかわれましたか。 ①とてもかかわれた ②かかわれた ③どちらでもない ④あまりかかわれなかった ⑤かかわれなかった
*③④⑤と答えた人はどうしてでしたか。親子に支援できたと思うことを書いてください。
【質問6】全体指導（みんなで遊ぶ）に参加した感想を教えてください。 ①とてもよかった ②よかった ③どちらでもない ④あまりよくなかった ⑤よくなかった
*③④⑤と答えた人はどうしてでしたか。全体指導で学んだことを書いてください。
【質問7】これから改善したいと思うことを書いてください。
【質問8】1回目5月15日キッズカレッジで、あなたの目的は達成できましたか。 ①できた ②すこしできた ③できなかった

図1 質問形式による学生アンケート

IV 実践の結果

1. 1回目

(1) 記述式レポートの結果

① 上級生やボランティアリーダーについて（29%）

「先輩やボランティアリーダーの接し方が勉強になった」と、見て真似て学んだことを29%の学生が記述した。「先輩たちはコミュニケーションをできるだけ長く続けていた」と、子どもと遊ぶ姿をコミュニケーションと受け止め、「できるだけ長く続けていた」と、長時間かかわる姿に驚くとともに、かかわりが続く様子を感じていた。子どもとかがかわる時には「視線を合わせて話していた」と、上級生やボランティアリーダーが身体を低く乳幼児の目の高さに合わせて床に両肘を付け、這うように座りこむ

姿勢に気付くなど、乳幼児とかかわる基本を感じとった。また、うつ伏せで取れないおもちゃを取ろうと身体を反転させて取っていた乳児を認めて「はいどうぞ」と、おもちゃを渡す姿に、「何かできたらほめていた」と、温かいかわりの中で、子どもの気持ちを受け止め、その良さを幼児自身が自覚できるように認めて伝えるかわりを感じとり、1年生らしい自分なりの言葉で記述していた。

ボランティアが、乳児がおもちゃを欲しがっていることに気付いて「これが欲しかったのね。はいどうぞ」と、気持ちを受け止め、笑顔でおもちゃを渡す姿に、「ほめていたみたい」と、乳児がしようとしたことを幼児自身が自覚できるように笑顔で認め、伝えた温かいかわりを感じとり、1年生らしい自分なりの言葉で記述していた。

ボランティアリーダーが子どもの気持ちを察し、別のおもちゃできっと遊ぶだろうと予測し、少し遠くにあるおもちゃを近くに並べかえる姿から「使い易くおもちゃを置き直していた」と、幼児の気持ちを察したり、環境を再構成したりして遊び易くしていた動きに気づく記述がみられた。さらに、子どもの思いを受け止め、子どもの動きに合わせて一緒に動く姿を「遊び方を教えていた」と、文章としては不十分だが、先輩やボランティアの動きを感覚的に察知した内容が書かれていた。

これらの学生の8割は、上級生やボランティアリーダーが親子へのかかわり、環境の再構成、認めたり励ましたりする雰囲気作りに気づき、そのかわりに気づく感性や親子と話すコミュニケーション、長い時間かわる意欲などを感じとっていたことが分かった。残りの2割の学生は、事前準備のリハーサル時に、「先輩方からのダメ出しが、さらに良くなった」と、指摘を受けたことを真摯に受け止め、恥ずかしがっている人は見る人が気持ち良くないと、自分を向上させようとする姿勢が見られた。「先輩にも言われたように、120%の完成度を目指したい」と、準備段階での心構えや、「先輩方からの助言でたくさん気付いた」と、様々な角度から自分

を見直し、助言を次に生かそうとしていたことが分かった。また、「いざやってみるとむずかしい」と、自分のイメージと実際が異なることや、「先輩たちがすごくリードしてくれた」と、上級生たちの助言を素直に受け入れ、次回に活かそうとする前向きな考え方を語った。

上級生やボランティアリーダーについて記述した学生は、人間関係の中で保育のあり方やコミュニケーションを豊かに学ぶとともに、指摘を真摯に受け止め、自分を向上させようとする前向きな考え方が培われていたことが伺えた。

② 親子について語る (22%)

「一人で遊んでいる子に話しかけたり、おもちゃで遊んだりした」と、1対1でかかわる難しさを語りつつも、相手の子どもが学生に親しみを感じ、安心してかかわるようになると、「最初は嫌がっていた子が、楽しそうに手をたたいたりリズムをとったりして、すごく嬉しかった」と、かかわり方が変化する姿に気付き、その変化を喜んで、親子と触れ合う楽しさを語った。また、「いないいないばあをすると笑顔になった」と、子どもとのかかわり方を工夫して、それが成功した嬉しさを書いた。リズム遊びで子どもから『おねえちゃん、タッチ』って言われた時すごくうれしかった」と、受け身の学生もいたが、その嬉しさの表現から、次回は自分から子どもにかかわるようになると推測できた。「長い間抱っこをしていたけど、全く疲れなかった」「お母さんも嬉しそうだった」などと、48%が親子と触れ合う楽しさを述べていた。

残りの学生は、「泣く子をどうすれば良いのか分からなくてとまどった」と、子どもとかわる難しさや「まだ話せない子どもたちが多くて何をしたらいいかわからない」と、対応の仕方に戸惑う内容を17%が書いた。「親子でいるところに入るのは難しい、母親が一番」など、親子とかわる難しさを9%の学生が実感していた。これらの学生には、面談時に学生のかかわり方が悪いのではなく、赤ちゃんは不安になったら泣くことが当

たり前で、何かを嫌だと感じて泣きたいことに共感することが重要である。無理に泣き止まらせる必要はないと伝えると、次回も頑張ろうとする意欲につながっていった。13%の学生は、「子どもが笑うと自分も嬉しく笑顔になる、子どもからもらう力はすごい」と、子どもの笑顔に答えようとする自分を意識していた。また、「元気な子ばかりと遊んだ」と、自分の行動を反省し、「その子に合わせて遊ぶようになりたい」と、振り返り、子どもの思いに沿ったかわりを学ぼうとする姿勢がみられた。その他の学生は、「一ヶ所でおとなしく遊ぶ子、片付けられない子、いろいろな子がいた」と、一人一人の子どもを見つめ、「子どもの興味がすぐ変わる」と、その子の遊びや活動を理解しようとしていた。

このように、親子との触れ合いについて語った学生は、楽しさを実感し、難しさを克服し、子ども理解を深めようとする意欲が見られ、幼児や保護者との関係の中で自分を高めようとしていた。

③ 今後に向けて (21%)

2回目開催に向けて記述した学生の中で、41%が「楽しかった」「またやりたい」「将来保育士になるために頑張る」「初めてだったけどすごく楽しかった!」「親以上の保育士になりたい」と、前向きな意欲を語っていた。59%の学生は、「ピアノを弾きながら歌えるようになりたい」「思ったより声が出せなくて」「子どもを理解し、遊ぶようになりたい」「普段の様子を事前に聞こう」「一人の子に集中して、他の子が見れなかった」「次回は髪の毛を染めない」など、学生自身の課題を振り返り、具体的な抱負を示していた。子どもの前では茶髪はやめようと教師に言われても修正できない学生もいる。自分を振り返り、自己課題を把握し修正するよい機会になったと思われる。

④ 心配なことについて (14%)

心配なことを記述した学生の中で57%が、「何も分らない所から始まり、すごくとまどった」「やる前がとても不安だった」「服装、接し方、手遊び

など不安は多かった」と、始める前に不安を感じていた。実施後について記述した学生は29%で、「すごく戸惑ったけど、楽しかった」「心配もあったけど一緒に遊びたい」「始めは、緊張して困ったけど、子どもと接しているうちに緊張もとれて楽しく一緒に遊ぶことができた」と、始める前に不安と楽しさが同居していた。中には、「途中どうしたらいいか分なくて」「既にあそんでいる先輩と子どもの中に入っていくのが大変」と、途中でも不安を感じた学生14%がいた。これらの不安な学生の実態を把握し丁寧に指導することが精神面の強い学生を育てることになると思われる。

⑤ 学生同士の仲間関係について（7%）

「誕生表に、どんな顔をするかを楽しみに皆で作った」と、参加する親子を思い描いて作ることを楽しんだり、「皆で作った」と、1年生の仲間が集まる楽しさを感じたりなどした。自主的に日程調整をし、作業手順を相談したことが「集まる日を決めて、分担したのがよかった」「会って間もないけど誕生表でまとまった」「ゼミのチームワークは、最強」と、仲間意識を感じた良さを述べていた。入学して間もない時期だからこそ、このような準備作業が人間関係を育む有効な手立てになることが分かった。

⑥ 環境の構成について（5%）

「親子が安心できる環境作りが必要と思った」と、衛生面や安全面の重要性を感じ、「すぐ遊べるようにすることを先輩に教えてもらった」と、事前学習で知ったことを実感していた。「準備に参加しておもちゃの位置やバランスも大事だと思った」と、事前準備で自分たちが行ってきた意味を再確認する記述があった。「先輩に教えてもらった」と、人間関係の中で学びとり、実体験の中で、使いやすく準備したりおもちゃを並べ直したりなどの環境の構成の重要性を感じとっていくことが分かった。

(2) 1回目の結果と課題

① 結果から分かったこと

授業で親子と出会う活動の場があり、先輩やボランティアリーダーなどが身近で、具体的な言葉かけやかかわり方、環境の再構成や雰囲気などを見て学んで真似ることが有効な手立てになることが確かめられた。また、親子とかかわる楽しさや難しさを語るなかで、自分自身を振り返ったり子どもの遊びや活動を理解しようとしたりする前向きな気持ちやこうなりたい抱負や次回の目的などの意欲を高めることが分かった。さらに、大学入学後の友人関係が希薄な時に、目標や、事前学習、事前準備、などの作業をともにする活動は、学生生活の安定につながることを再認識した。

1回目の活動の記述内容から、自分を振り返り、自己課題を把握し、自分を高めようとする意欲は、先輩やボランティアリーダー、幼児や保護者と、事前準備や事前作業をともに活動する関係性の中で育ったことが明らかになった。

② 課題

記述式のアンケートからは、学生が自分の課題に向かって目的をもって取り組んだことが、保育内容の理解を広げ深め、前向きに取り組む姿につながったかを確認することができなかった。また、当日になっても不安をもち、かかわりながらも不安を感じていたことが分かった。

そこで、その不安がどの程度で、いつ不安が解消されたのかを確かめ、保育を考え続けて実践する態度や意識をもち続けたか、その不安が解消され自信に繋がっていったのかを検証する必要があることに気付いた。

2. 2回目

(1) アンケート結果から分かったこと

「実践の目的を意識していたか」「不安は、いつ解消され、いつ自信につながったか」「自分のためになったか」など、質問形式のアンケートを作

成し調査した。ここでの記述は、アンケート結果の1回目と2回目を記載することで比較検討しやすくした。

① 目的意識について

1回目は「手遊びや歌を覚えられなかったので動作や声が小さくなった」「笑顔が固いので自然にやわらかい笑顔ができるようにしたい」など、具体的な課題を意識して取り組む姿勢が見られた。

2回目は子どもとの触れ合いを75%、全体指導を17%が記述した。

子どもと親を受け止め、ともに楽しみ、「母親と離れられない子には母親の近くでお絵描きした」と自分なりに指導方法を考え工夫していた。自分の課題「動作や声」「笑顔」について記述し、「母親と離れられない子には母親の近くで」と、前回の課題を克服する提案を工夫していたことから、回数を重ねることで目的意識を強くもち、その意識が保育内容の理解を広げ深めたと、思われる。このような課題意識をもった学生は自ら工夫し、改善方法を見つけて、前向きに取り組む様子が見られた。

② 不安についての変化から

1回目は、実施前に不安が「あった」学生が54%だったが、2回目は16%となり、「少し」不安があった学生が38%だったが、2回目は50%に変化した。また、実施後は不安が「あった」学生が15%だったが、2回目は16%になり、「少し」不安があった学生が23%だったが、2回目は50%になった。これらのことから、実践中に不安が解消され、楽しさに変化していったことが考えられる。

1回目に不安な学生は、全体活動の静かな場面に、楽器を鳴らしたり走りまわったりする幼児へのかかわりに戸惑ったことや、ボランティアリーダーのようにできないことに引け目を感じたなど、漠然とした不安もっていたが、2回目は「なかなか片付けられない子へどのようにかかわったらよいか分からない」と、保育の専門性に触れた不安へ変化していた。

不安が減った学生は、全項目のコメントが前向きで、「年齢の低い子へ

の手遊び」と、次の課題を考え、「全体活動への誘導」と、その子に応じたかかわり方を学びたいなど、自分が不安になった意味や意図を読み取っていた。反省会で簡単な手遊びをボランティアリーダーが紹介したり、年齢や育ちに応じた個々へのかかわりや無理強いしないかかわり方に気付いていたりしたこと、体験から目的やかかわり方を把握し、保育への理解が深まったと思われた。少し不安と緊張感をもち、それを乗り越えた時に成長を実感していくことが分かった。

③ 自分のためになったについて

「とてもよかった」が1回目38%から2回目58%に変化し、1・2回ともに全員が参加して「よかった」と答えた。「子どもたちがあそびやすいように、いかにも料理してますって見えるように復元作業？するってのも、すごくおどろいた」と、環境を再構成することや、「練習でできたことを本番で失敗した。次はできるようにしたい」と、失敗を克服すること、「走り回る子どもが多く、落ち着いて遊べるようにする方法が分からなかったが、知れた」と、個に応じたかかわりを学んだことを記述した。

保育内容の理解を事前準備や事前作業で、先輩やボランティアリーダーや仲間と工夫し、改善方法を見つけたことや、少しの不安と緊張感を乗り越えた時に成長を実感していたことが分かった。また、先輩やボランティアや大学教員との関係性の中で、見たり真似たり感じたりして親子を理解し、かかわりの意図や意味、目的・保育の見方・考え方を取り入れていったと思われる。自分の目的は達成されましたかの質問に、「すごく」が42%「できた」が33%「少し」が25%と、全員が自分なりの達成感を感じていたことが分かった。

(2) 結果と課題

1回目に「振り返りシート」(表1)に親子に対するねらいを書いて参加したが、実際の場面では目的意識がもてなくなる学生がいた。「振り返り

自信をもって親子と触れ合うことができる実践力を高める

シート」の必要性や扱い方を検討する必要がある。

1・2回ともに不安があった学生(2名)は、事前授業や全体活動の準備に欠席したため、自信がもてずに当日を迎えたと思われる。

学生の中には、全体活動が大切と考え、自由感がある遊びの中で「子どもと遊びを理解してかかわる」大切さに気づかない者もいた。幼稚園教育要領第1章総則第1 幼稚園教育の基本「その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう……」⁷⁾、保育所保育指針第3章「保育の内容」の「ねらいを身に付けたり、内容を体験させたりすることではない。一人一人の特徴や成長していく過程の違いを認識し、適切なかかわりができる……」⁸⁾といった、保育の専門性を再確認する必要があった。

入学後3カ月経った2回目の活動では、保育の難しさを感じ始めていた。親子とのかかわりを「上手くやろう」「自分を試す」と自分の行動が中心だったり、「させよう」「教えよう」に目が向いたり、失敗体験を負担に感じたりする学生は、自分の成長が実感できなかった。また、保育者としての適性に対する戸惑い、保内容の理解度の差、負担感などが、欠席や自主活動への不参加として表れる学生もいた。これらの学生は、大学教員が日常生活の触れ合いで心のつながりを強め、授業に参加したくなるようなかわりや不安を乗り越える援助を必要としていた。

基礎ゼミ指導は、学習指導に加えて、不安な学生とのかかわりを深める指導が重要と再確認した。入学当初から学生の思考や行動の傾向を把握し、学生指導を併せて心がけることが大切だと思われる。

3. 前期「子ども学総論」最終レポートの集約・整理から

前期レポートからキッズカレッジに限った内容を集約・整理したところ、「誕生表作りで、ゼミのみんなで作業しているときが楽しかった」「みんな意見を言い合い、積極的になったし、ゼミのみんなとも仲良くなった」「ゼミ企画を他のゼミの人に見てもらえ、恥ずかしかったし戸惑ったけど

人前に出ることに慣れ、ゼミ内の団結力も深まった」と、仲間関係ができたことを評価していた。また、「先輩が厳しく、高校の部活のような雰囲気緊張感をもった」「先輩を見て、思った以上に子どもに接することができた」「爪を切る・ピアスを外すなど身なりを整えると、子どもが近寄り、親も変わった」など、先輩を見て、先輩の意見で自分自身の行動や態度を見直したことが分かり、異学年交流の重要性が伺えた。「パネルシアターから離れない子に『みんなが見えないからね。バック、バック』と優しくいけないことはいけないと教えていた」「さすがプロと思った。親子だけでなく私達も楽しくなった」「『子どもが泣いちゃった時は自信を持った状態で抱っこしなきゃだめだよ』と教えてくれた」など、ボランティアリーダーの具体的な助言が役立つなど、異世代・異学年交流の必要性が伺えた。

「授業で分からない単語や意味がたくさんあるけど、ゼミで計画や準備をするうちに教えてもらえ、楽しくなった」「授業で習った子どもの様子を実際に見たり知ったり発見したりした」「2回目は私達が司会から全てをし、ほめてもらい嬉しかった」と、保育の場面でその時々目標（ねらいや内容）を見つけ、親子の実態や発達、かかわり方に気付き、成果を実感する過程を体感することで、授業内容の理解を深めていた。「子どもが夢中になったり、遊びが持続したりするために、どう関わったらよいかを見つけない」「恥ずかしがらない、声を出す、楽しそうに大きく身振り手振り、自信を持って、練習する、柔軟に対応、全力を尽くす、自分が楽しむ、ゼミ内で計画や準備をきちんとする」など、それぞれが自分の課題や目的をもち、後期に向けてしたいことが多く書かれ、キ学生の学びにつながったことが分かった。中には「自分も意見を出せるように変わった」「私は『どうでもいい』といった思考にすぐ行っちゃう。先生のプラス思考に憧れる。何回かそんな考えじゃだめと注意され、後期は今の自分を変えてゼミのみんなとの連携し、困っている人がいたら協力して積極的にかかわり

自信をもって親子と触れ合うことができる実践力を高める

たい」と、自分を見つめ、自己改革を記す学生がいた。

最終レポートからは、仲間関係や心の交流、葛藤や喜びなどが丁寧に書かれ、学生の心の内を読み取ることができた。一人一人が親子へのかかわり方を学び、授業で以前に聞いたことがキッズカレッジでのこのことだったと、授業で重なっていく過程や、実践のたびに反省して自分を振り返り、次は「こうしよう」と考え工夫して次を頑張ろうとする意識をもち続けて取り組んだ様子が読み取れた。

V まとめ

レポートや質問事項の回答から、親子とのかかわりとともに、仲間やスタッフとの様々な人とのかかわりの中で、成長していく様子を読み取ることができた。

参加当初に不安を感じた学生も、ボランティアリーダーや上級生と同じようにかかると、子どもと一緒に遊んでくれて楽しいと感じるようになった。保護者は学生に温かく我が子のことを話そう、かかわらせようとしてくれるので安心して話すことができたなどと、親子と触れ合う緊張感が変化していく自分を感じていた。上級生やボランティアリーダー、大学教員の動きを見て、授業や事前学習で聞いたことを徐々に思い出し、落ち着きを取り戻していたと思われる。自分が親子に受け入れられることを感じると、自分の目的やかかわりを意識して振り返り、次の課題を見つけようと保育内容の理解が広がり深まっていくことも分かった。

1年生には、親との触れ合いは難しい課題と思われたが、むしろ、このような経験が、親とのかかわりを不安に感じる気持ちを和らげ、親子が一緒にいることを自然な姿と感じ、保護者とともに子育てしようとする意欲につながったと思われる。

異年齢・異世代間の交流学习が学生の不安を和らげ、徐々に心を開いて

自分から話しかけ、一緒に遊んで、ともに楽しむかかわり方を身につけ、自ら保育内容を充実することで不安や緊張を自信に変えていたと思われる。学生たちの自信は、学生同士や教員、上級生やボランティアリーダーや保護者など様々な人とのかかわりのなかで熟成され、自分で解決策を見つけるなかで育まれていくことを実感した。

反省会で「難しいリズム遊びだった」と指摘を受けて負担感を感じた学生も、学生同士や個人面談で認められ、次回のリズム遊びを考えたり、ボランティアリーダー研修会でリズム遊びを発表したりして、失敗体験を乗り越えて成功体験を得た。「先輩やボランティアが厳しく叱ってくれたので高校の部活のような雰囲気緊張感をもってできた」「投げやりな性格を変えたい」「やっぱり私は保育者ではなく、看護師になりたい」と、生きる道を模索し、自分を真剣に振り返り、考え続けて実践する態度や意識をもち続ける者もいる。

大学入学後の友人関係が希薄な時期に、子育て支援活動を開催する目標を共有し、誕生表作り・手遊びやリズム遊びの練習・お便り作り・壁面製作・製作コーナーの相談・会場準備や片付け、実践、先輩たちとの反省会などで、同じゼミの仲間と様々な作業をする楽しさを味わう活動は、学生生活の安定や楽しみになり、豊かな感性やコミュニケーション能力、真摯に自分と向き合い学び続ける意欲など、精神面の強さにつながる一助となったと考える。

VI おわりに

本論文は、学内子育て支援における、近隣NPOや保育園、民生児童委員や保健所などの行政と共に実践した事例を取り上げ、学生の保育実践のあり方を考察した。本実践は平成22年に公布された「社会福祉援助技術(演習)」を分割し、保護者に対する保育指導を学ぶ「保育相談支援(演

自信をもって親子と触れ合うことができる実践力を高める

習)』²⁾⁸⁾に基づいて実施した。学生は親子との触れ合い体験を通して親子へのかかわり方を学び、保育内容の理解を広げ深め、考え続けて実践する態度や意識をもち続けるなど様々な学びがあることを述べた。本論文では、学生の学びは学生のかかわりを求める親子や学生を支える先輩、ボランティアリーダーなどの人々がいる人間関係の中で育っていくことを言及した。

今後は、キャリアステップ学習における子育て支援の教育過程を作成し、一般化していきたい。

* 本実践研究は、文部科学省平成 23 年度大学改革推進等「大学生の就業力支援事業」補助金によって実施された。

引用文献

- 1) 厚生労働省 2008『保育所保育指針』フレーベル館
- 2) 保育士養成課程等検討会2010『保育士養成課程の改正について（中間のまとめ平成 22 年 3 月）』
厚生労働省雇用均等・児童家庭局長 2010『保育士試験および保育士養成課程の改正に関して、児童福祉法施行規則の一部を改正する省令等の施行について』（平成 22 年厚生労働省令第 90 号）
厚生労働省 2010『児童福祉法施行規則第六条の二第一項第三号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法の一部を改正する件の施行について』（平成 22 年厚生労働省告示代 278 号）
- 3) 全国保育士養成協議会 2009『保育士養成資料集第 50 号—指定保育士養成施設卒業生の卒業後の動向及び業務の実態に関する調査報告書 I』 p 246、p 277
- 4) 『平成 23 年度厚生労働省委託事業 保育士再就職支援事業・保育園向け報告書』（2011）ポピンズ
- 5) 文部科学省 2002『幼稚園大学教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園大学教員のために—幼稚園大学教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書』
- 6) 木村美知代 2012『持続可能な福祉実践力を高める取り組み～地域子育て支援団体・サークルと大学との協働～2011 年度子ども学専攻取り組報告書・ボランティアリーダー研修会事例集』 同朋大学社会福祉学部
- 7) 文部科学省 2008『幼稚園教育要領』フレーベル館

木 村 美知代

8) 大嶋恭二・金子恵美 編著 2011『保育相談支援』建帛社

※ 同朋福祉編集委員会規定により「実践報告」としての査読済み

(本学非常勤講師：保育内容 (人間関係))